

知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe
(法政大学教授)

第7回 思いやりの心はどのように発達するか

道 徳科の目ざすところは、よりよく生きる力を育てることにあり、そのため学習指導要領では22の内容項目が掲げられています。これらの項目は、相互に関わりなく独立しているわけではなく、大きく捉えれば「思いやり」という共通要素があるように考えられます。思いやりは、自分自身に向けて、他者に向けて、集団との間で、そして、生命や自然との間でも共通して、その関わりを支える土台となる心の働きだと思ふからです。

今回は、思いやりの心の発達について考えてみましょう。

相手の立場を思いやる力——役割取得能力

ここでいう「思いやり」とは、相手の気持ちを推測し、コミュニケーションを取って理解しようとすることです。この能力は「役割取得能力」とよばれ、自己の立場のみならず他者の立場に立ち、相手の感情や考えを理解できることを指します。つまり、重要なのは、「自分と他者は同じ人間なのだから、言わなくてもわかる」と発想するのではなく、「同じ人間であっても、違う個性である」と理解することだといえます。役割取得能力は、下表のレベル0～4のように、発達段階に応じて成長していきます。

レベル0	自分と他者の視点を区別することが難しい。
レベル1	自分の視点と他者の視点を区別して理解するが、相手の気持ちの推測については、「笑っているから楽しいのだろう」という表面的なレベルにとどまる。
レベル2	他者の視点から自分の思考や行動について内省できる。また、他者もそうすることができることを理解する。外から見える自分と、自分だけが知る現実の自分という二つが存在することを理解するようになる。
レベル3	自分と他者の視点以外、「私」と「あなた」を外から見ている第三者の視点をもつことができるようになる。
レベル4	自分がさまざまな社会的カテゴリーに所属していることを意識できる。また、経験していない立場をイメージして推論できるようになる。

表 役割取得能力の発達段階

思いやりを育てる教育

役割取得能力を育てる実践の一つを紹介します。表のレベル2の役割取得能力を身につけることを目指し、二人称の葛藤場面を提示する実践です。二人の登場人物の視点から葛藤場面について考えることで、人によって考え方が違うことに気づかせ、役割取得能力を高めることができます。ここで扱った資料については、ウェブサイトをご参照ください(※)。

本実践では、教材を途中まで読み進め、二人の中心的な登場人物の思いが擦れ違って衝突が起こる葛藤場面で中断を入れて、互いにどんな行動を取って解決するか、ペア・ロールプレイを行います。

例えば、登場人物のAとBが衝突する場合、ペア・ロールプレイでは、Aの立場でロールプレイを行った後、役割を交代してBの立場でもロールプレイを行います。このとき、子どもたちは、Aの立場に立ったときにはAに寄った考えを、Bの立場に立ったときにはBに寄った考えをもちやすくなります。そのため、AとB両方の立場に立つことで、Aの立場に立ったときとBの立場に立ったときの、自分の考えの矛盾に気づき、他者の視点を意識できるようになります。この気づきが、「同じ人間であっても、違う個性である」と理解することにつながります。

授業のまとめでは、子どもの発達に応じた「書いて表現する」ワークを行います。「私から登場人物のAへ」(「私」が「私」の立場で「あなた(A)」の気持ちを考える練習)という手紙を書かせます。相手の気持ちを考えること、そして互いの気持ちを表現することを学ぶことができます。

※資料は、こちらから
ご覧いただけます。



渡辺弥生 ●わたなべやよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』(筑摩書房)、『子どもの「10歳の壁」とは何か? 乗り越えるための発達心理学』(光文社)など。監修に『まんがでわかる発達心理学』(講談社)など。光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。